

第1回委員会の概要と成長段階における考慮すべきギャップの状況について

1 第1回少人数教育推進検討委員会の概要

① 「はぐくみプラン」の成果等の検証について

(1) 委員の意見

- ア 経緯、導入時の目的について
 - ・質疑等特になし
- イ はぐくみプランの効果について
 - ・アンケート結果によると、少人数学級編制により、きめ細かな指導が可能となり、基礎学力の向上や良好な人間関係づくりに一定の効果が認められる。
 - ・基礎的・基本的な学力を身につけさせることや特別な支援を必要とする児童生徒への対応が可能となり、結果として落ち着いて学習を行えるようになった。
 - ・基本的な生活習慣を守って学校生活を送る児童生徒が増え、児童生徒がお互いの特性を把握でき人間関係が深まり、教え合ったり助け合ったりする中で学級のまとまりも向上している。
 - ・小学校3年生になった段階で35人を超える学級編制となる場合がある。0.5の加配はあるが、更なる少人数教育を推進する必要がある。

ウ 本県学校教育の課題について

- ・いじめ不登校など課題を抱える児童生徒が増加しており、よりきめ細かな支援が必要である。
- ・学校の問題は複雑化・困難化しており、解決には関係機関との連携や教員の増員が必要である。
- ・特別支援学級は、8人学級編制となっており、学年が違い、特性も違う児童生徒を担任一人で指導しなければならない状況にあるため、教員の配置についての対応を考えなければならない。
- ・アンケート結果をより詳細に分析し、単級アクティブへの対応、学年進行によるギャップの解消など、更に課題を整理する必要がある。

(2) 決定事項なし

② 「25人を基本とする少人数教育の計画的・段階的導入検討に係る調査」の実施について

(1) 委員の意見

- ・保護者へのアンケートは、小6の保護者はまず中1への導入を希望するのではないか、保護者へ制度等の十分な説明ができるか心配などの意見を踏まえ、実施の有無について検討が必要である。
- ・現状の課題を明らかにするため、調査項目について工夫が必要である。
- ・検討委員会での議論を深め、多忙化等の対策も講じた上で、実施を8月以降に延期してはどうか。

(2) 決定事項

- ・1学期中の調査を見送り、第2回委員会にて再提案する。

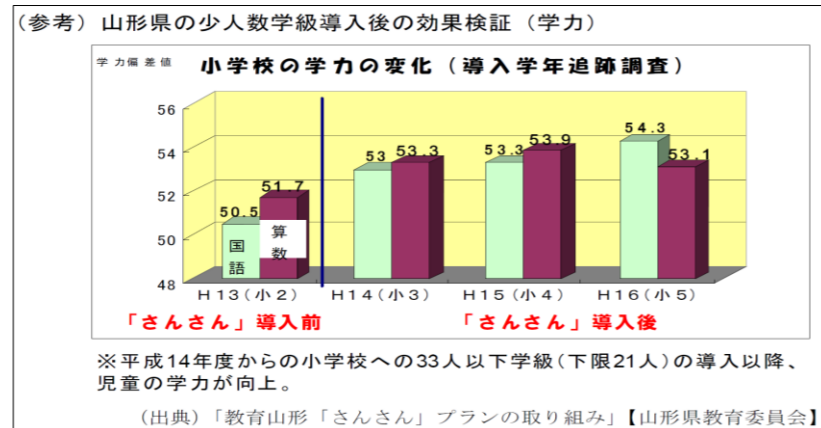
学級規模に関わる研究等から ⇒ 資料2・3・4

多人数指導より少人数指導の方が児童・生徒の学習面、情緒面等での効果が期待できる。

◇「少人数学級の推進など計画的な教職員定数の改善について」

(文部科学省一公立義務教育諸学校の学級規模及び教職員配置の適正化に関する検討会議) 【資料2】

双方向・協働型の新しい学びへと授業を変革することが必要であることから、全教科でより一層きめ細かい指導を充実させるためには、学級規模そのものの縮小が必要であると指摘している。



◇教育条件整備に関する総合的研究(国立教育政策研究所一学校規模研究分野) 【資料3】

この研究では、次のような結果が報告されている。

- ・学級規模を縮小し、学級数が増えると、生徒同士の人間関係に関わる問題が解決しやすくなる。
- ・学級規模が小さくなるほど、授業中の学習行動や家庭学習の取組状況により影響を与えるが、前年度よりも学級規模が大きくなると、このどちらについても好ましくない方向に変化する生徒が増えることにつながる。

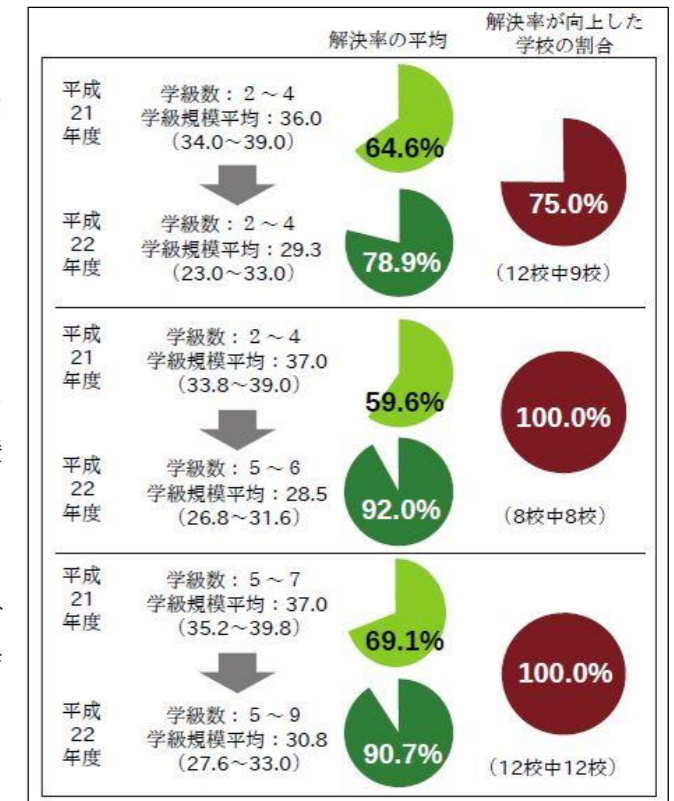
◇「クラスサイズと学業成績および情緒的・行動的問題の因果関係」に関わる研究(日本教育心理学会)

【資料4】

クラスサイズの拡大は、

- (a) 学業成績を低下させること、
- (b) 教師との関係上のストレスには影響しないが、教師からのサポートを減少させること、
- (c) 友人関係におけるトラブル(いじめ、ケンカなど)には優位に影響しないが、相互の援助行動の減少をもたらすこと、
- (d) 攻撃性には優位に影響しないが、抑うつを高めること、が示されている。

こうした影響の広さを鑑みると、クラスサイズは学級運営上、重大な意味を持つ変数であると結論づけられるとしている。



2 幼児期から小中学校各学年における幼児・児童・生徒の学習・生活の状況 ⇒ 資料5

成長段階において、それぞれ壁がある。

【小1プロブレム】

小学校に入学した1年生が、新しい環境に馴染めず、集団行動ができない、周りとは違う行動をしてしまう、授業中座ってられない、立ち歩く、先生の話を聞かない、という状態が継続する問題のこと。

【10歳の壁(9歳の壁)】

学ぶ内容が難しくなり、学校の勉強が分からなくなり始める、勉強についていけない児童が増え始める学習面での壁のこと。また、学習に限らず、運動能力・人格形成などにとって重要な時期として捉えられることもある。

【思春期】

11才前後から始まり、18才頃まで続くと言われている。心も身体も大人ではないが、全く子どもでもない状態(思春期前期)から始まり、次いで大人と子どもが入り交じりせめぎあう状態(思春期中期)、そして心も身体も大人であることを確かなものとしていく状態(思春期後期)の3つの段階に分かれる。身体の成長に心の成長が追いつかず、誰もが不安定な気分になりやすい時期。

【中1ギャップ】

小学校から中学校に進学した際、不登校やいじめの増加などの問題が生じる現象のこと。学習内容や人間関係の変化、心身の発達など幾多の原因が作用し合っていると考えられている。